

梅崎春生「狂い風」論

―「戦争」「家父長制」そして「天皇制」―

高 木 伸 幸

はじめに

梅崎春生の長編小説「狂い風」^①は、『群像』昭和三十八年一月号から五月号にかけて連載された。芸術選奨文部大臣賞を受賞するなど、梅崎の作品の中でも高い評価が与えられている。例えば武田泰淳は書評「梅崎春生著『狂い風』」（昭和三十八年十月四日『週刊朝日』）の中で、「家族小説、戦争小説としても傑作」だと評している。^②

「狂い風」には福次郎を父に持つ矢木栄介・城介の双子の兄弟が登場し、伯父幸太郎と彼らとの関わりも描かれている。「家族小説」と言うに相応しい物語である。近年、戸塚麻子も〈家族〉が「狂い風」の「最も重要なモチーフ」だと指摘している（『戦後派作家 梅崎春生』平成二十一年七月、論創社）。また「狂い風」には、矢木城介の戦地における自殺が記されているのを見れば、「戦争小説」という言い方も成り立つ。「狂い風」のモチーフを大きな枠組みで捉えれば、

確かに「家族小説」「戦争小説」と言うことができよう。

しかし「家族小説」「戦争小説」として、「狂い風」にどのような内容が記され、如何なる表現が試みられているのか、その内実について、これまで具体的かつ適切な考察が為されてきたとは決して言えない。特に「家族小説」および「戦争小説」という、それぞれの側面が、作品の中で如何にして繋がりを持ち、呼応し合っているのか、その点については全く論じられていない。本論は「家族」と「戦争」に注目しながら、「狂い風」のモチーフをより深く捉え直そうとするものである。

結論を少し記せば、「狂い風」には、「家族」と言うよりも、「家族」に関わる戦前日本の国家イデオロギーの問題が扱われている。「戦争」もその問題と強く結びつくことで、梅崎春生の批判を込めながら表されている。以下に考察を進めたい。

トラックに弾き飛ばされ、風のように舞い上がったバス停留所の標識柱が、通りがかりの若い女性の背中に直撃する。「狂い風」の物語は、その事件を「私」が目撃する場面から始まる。「私」は物語の現在における視点人物と言うべき存在で、背中を痛めて病臥中の大学講師の友人矢木栄介を「私」が訪ね、二人が会話する形で物語は進行する。次第に栄介の回想が多く挿入され、城介が戦地で自殺するに至る顛末を中心に、栄介、城介の家庭、つまり矢木家の過去が明らかにされていく。その回想には多く伯父幸太郎が登場し、また物語の現在においても、幸太郎は栄介と関わる存在として描かれている。栄介は矢木家の過去を語る際には視点人物となり、物語の現在でも、幸太郎が現れる場面については、「私」でなく、栄介の視点で表されている。小説全体を通しての主人公は、矢木栄介と見ることができよう。

右の「とき」「狂い風」の中で、栄介の回想の中で描かれる矢木家については、作者が育った梅崎家を土台としながら、そこにフィクションを加える形で表されている。例えば梅崎春生の生家が九州福岡市にあったように、矢木家の回想も九州が舞台になっている。また春生が梅崎家の次男で東京帝国大学に進学したように、栄介は矢木家の次男であり、やはり東京の大学に進学している。従って栄介

像には、基本的に作者自身が反映されている。しかし梅崎家は男ばかりの六人兄弟であったのに対し、矢木家は男四人、女一人の兄妹で、しかも長男竜介は病で早世し、かつ次男栄介、三男城介は双子という梅崎家と異なる設定になっている。さらに栄介の大学在学中に父福次郎が脳出血から病の床に就き他界するのは、春生の父健吉郎における同様の事実に基づく。ただし春生の父はもともと陸軍軍人であるが、栄介の父は当初県庁役人として描かれている。

こうした矢木家の設定の中から、特に次の二点に考察を向けたい。城介が戦地で自殺するに至る顛末、そして栄介らの伯父幸太郎の人物像である。次節以降で論ずるように、前者がほぼ事実準じて記されているのに対して、後者については、作者による創作が取り分け多く加えられているからである。

つまり「狂い風」の物語の中で、「城介の死」と幸太郎像は、それぞれ事実と創作の比重において両極に位置している。また「城介の死」は「戦争」と、幸太郎像は「家族」と、ともに密接に関わるところがある。

「狂い風」のモチーフを読み解く鍵が、これら二つに隠されていると言えそうである。

二 (1)

—— 城介は中学の級友三人と入ったうどん屋で食逃げ事件を起こ

す。城介は自ら退学を申し出るが、「視学や世間態に気がねばかりしている」校長は、城介を「事件以前の日付け」で退学させようとする。級友三人の父親は「裁判官」「電鉄重役」「医師」という社会的地位を利用し、「事件のもみ消し」を図る。結局、当時県庁役人を追われ「小会社の庶務係に勤めてい」た父親を持つ城介のみが退学という「一番悪いクジを引いた」。城介は幸太郎の勧めに従い東京の葬儀屋へ奉公に出、やがて陸軍から召集され、大陸に渡る。従軍中の過酷な環境から喘息の発作を起こした城介は、衛生兵の立場を利用し、鎮咳剤としてパビナールを乱用、中毒となる。城介の薬品不正使用は発覚するが、「進級のことばかり考えている陰湿な性格」の上官中田少佐は、「部隊の中から中毒者が出た」ことを隠すためか、城介の「強制入院を撤回」する。城介は内地帰還の一週間前、薬を飲み自殺した。

「狂い風」の物語の中から、城介の死に至る顛末を摘んで要約すれば、以上の通りである。応召の前までは栄介の回想で、戦地での出来事については、加納と言う城介の戦友の証言によって記されている。

梅崎春生はエッセイ「暴力ぎらい」（昭和三十九年三月『えきすぶれす』）で、「（中学在学中に）私の弟忠生は、友だちとうどん屋に入り金がなくて食い逃げし、それが学校に知れて退学になった。それから忠生は東京に奉公に行き、兵隊にとられて蒙古で自殺をし

た」と記している^⑤。つまり城介の死に至る顛末は、細部はともかく、その大筋において、梅崎春生の弟忠生のそれに基づいて記されている。従って「狂い風」という小説には、間違いなく、弟忠生の死に対する作者の思いが託されていると言えよう。既に戸塚麻子も「梅崎春生の中に、忠生の死を何とか捉えたいという気持ち、それを文学作品の中で表現したいという強い衝動があったのではないかと推測」している^⑥。いま少し踏み込んで言えば、梅崎春生の中に、弟忠生の命を奪ったものに対する大きな怒りが存在し、忠生の死を城介の死として表現することによって、弟の死の原因を追及し批判せんとした。「狂い風」を著した作者の動機と意図について、そのように捉えることができる。

城介の死の原因を考えるに、言うまでもなく、直接には「戦争」「軍隊」が挙げられる。薬物中毒となり、克服できなかった城介の意志の弱さを難ずることもできないが、軍隊生活が城介を薬物依存に追い込んだのは確かであり、そもそも軍隊へ召集されなければ、全ては起こりえない不幸であった。従って「戦争小説」と評された「狂い風」は、戦地で弟を喪った作者による〈戦争批判〉〈軍隊批判〉の小説とまず言い換えることができる。例えば先にも触れたように、梅崎春生の父健吉郎はもともと陸軍軍人であったのに対し、矢木栄介の父福次郎は当初県庁役人として描かれている。栄介の視点から〈軍隊批判〉を描く上で、栄介の父が軍人であるのは都

合が悪く、栄介をより効果的な立場へ置こうとしたためであろう。

次いでうどん食逃げ事件以来、節目節目で城介と関わった人間たちが、城介を不幸へ導いた遠因かとも思われる。中学校長、伯父幸太郎、級友三人の父親、そして中田少佐である。このうち伯父幸太郎については次節以降で詳述したい。他の人間たちは、いずれも自らの立場を有利に導くことを優先した点で一致し、その結果、城介の更生や病の治療は置き去りにされた。彼らとの接触がなければ、城介が自殺という最期を迎えることは、あるいは無かったかもしれない。この巡り合わせの不幸とも言える城介の人生の軌跡と、物語冒頭での女性の事件、そして物語末尾で栄介が「不安定に揺れ」「舞い落ちる」風、いわば「狂い風」を見上げていることを合わせて考えると、この小説は「戦争批判」のみならず、偶然の出来事に左右される「人生の不安定感」を表した側面も持ち合わせていると言えるかもしれない。例えば栄介が背中を負傷した人物として設定されているんだらうな「いつ敵が飛びかかって来るか判らない」と語っているのを見ても、背後から不幸に襲われるかもしれない人生の不確かさが強調されているのは確かめられる。

ここでモデルとなった忠生の死に関する作者の発言に改めて目を向けると、梅崎は先の引用の後に、「修猷館（注、春生、忠生が通学した中学校名）の校則が忠生を自殺に追いやったのである。私は

その修猷館を憎んでいる」と記している。自殺の場となった軍隊でなく、むしろ退学させた中学校に弟の死の原因を見出しているのである。

しかし、そのことに注意すべきなのは、同じエッセイの中で、梅崎は自身も通った修猷館中学の「校則」「校風」が「厭」になった理由として、同校で下級生が「鉄拳制裁をうける」のは「軍隊と同じ」であり、その「暴力を呪った」と記していることである。「私の戦争ざらひはその暴力ざらいから来ている」とも書いている。梅崎春生は自身が通い、弟を退学させた修猷館中学に「戦争」「軍隊」のイメージを重ね、それ故に厭悪しているのである。忠生の死の原因として中学退学を記す梅崎であるが、その奥にはやはり「戦争」「軍隊」を見出していると言うべきであろう。

「狂い風」において、うどん食逃げ事件以来、城介と関わった人々が、どれだけ事実在即しているのか定かでない。しかし、少なくとも中学校長の人物像には、弟を退学させた修猷館中学に対する右の「ごとき作者の厭悪の気持ち」が反映されていると見てよからう。だとすれば、中学校長以下との関わりによって、城介が死へと導かれていったそのことも、単なる巡り合わせの不運、偶然の不幸と解すべきではあるまい。彼らの背後には、「戦争」「軍隊」が、いま少し正確に言えば、軍隊を抱え、戦争を遂行していた戦前の日本社会が存在しているのである。

「戦争小説」と評された「狂い風」は、城介が戦地で自殺するに至る顛末を表すことによって、戦時下である故の〈生の不安定感〉をタイトルに象徴させた小説、ひとまず、そのように解釈することができよう。

二 (2)

次に「家族小説」としての側面を具体的に読み解くためにも、伯父幸太郎の人物像について考察してみたい。

「狂い風」において、幸太郎は矢木家の次男栄介の伯父であり、栄介の大学までの学資を援助する人物として描かれている。一方、梅崎春生も梅崎家の次男であり、大学までの学資を援助してくれた伯父が確かに存在した。従って春生の学資を援助してくれたこの伯父が幸太郎のモデルに該当する人物と言える。しかし幸太郎像の形成においては、〈学資を援助してくれた伯父〉という部分をモデルから借りているだけで、その多くは作者の創作に拠る。

例えば、幸太郎は栄介の父福次郎の兄、つまり父方の伯父であり、正確な場所は描かれていないが、福岡市とおぼしき福次郎宅の近隣で海産品問屋を営んでいる。対してモデルの伯父は氏名が古賀朝一郎^⑦、つまり母方の伯父であり、「台湾花連港」で「幾つかの会社の社長を兼ね」ている人物であった。風貌についても、幸太郎は「ふとって」「つき立ての栗餅に似たふくらみを、首の根っこにぶら下

げていた」のに対し、実際の伯父は「顔の長い人物」であった^⑧。また「狂い風」の栄介は、父福次郎の通夜の席で幸太郎と口論したことで、大学卒業を前にして、以後幸太郎から学資の援助を打ち切られている。一方、梅崎春生の場合は、自分の怠けから大学を三年で卒業できなかった故に、自ら「返上して、アルバイト生活に入った」。しかし「卒業論文も書かねばならぬし、とうとう六箇月目に伯父に泣きついて、学資を復活して貰った」^⑩のであった。さらに「狂い風」の幸太郎は物語の現在においても存命中になっているが、モデルの伯父は終戦後台湾から引き上げ病の床に就き、昭和二十二年頃、亡くなっている^⑪。もう一点、梅崎春生の妻恵津の証言を挙げれば、モデルの伯父は「あたたかい感じの顔の立派な方という印象をうける人物であり、「梅崎はこの伯父に生涯恩誼を抱きつづけ、感謝していた」とのことである^⑫。「狂い風」に描かれた幸太郎の人物、幸太郎に対する栄介の感情は、明らかに作者の創作と言える。幸太郎は「狂い風」の中でも、特に梅崎春生による創作を多く含んだ登場人物と見做せるのである。そして、かくのごとき幸太郎像の中でも、幸太郎をあえて〈父方の伯父〉に設定した創作に注目したい。それと云うのも、幸太郎は矢木栄介の父福次郎の兄となることで、〈矢木本家の家長〉として君臨することになったからである。ここに梅崎春生の重要な創意が認められる。

このことと関連して、幸太郎による栄介への学資援助には、幸太

郎の跡継ぎ問題が絡んでいたことにも注意されたい。幸太郎は「子種に恵まれなかった」故に、「栄介城介の双子の中、勉強の出来る子の大学までの学資を出してやろう。そのかわりに自分に子供が生れなかったら、その子を養子として幸太郎のあとを嗣がせたい」と考えた。城介は中学を退学し、結局栄介が援助を受けることになったのである。ただし城介に関わる回想の中で、栄介、城介の兄弟は、実は福次郎の子でなく、本当は幸太郎の子かもしれないことが仄めかされている。いずれにしても、跡継ぎを考えた上での学資援助であり、この設定も作者による創作と見られるのである。

さらに直接幸太郎に関わる設定でないものの、長兄竜介が中学卒業から間もなく、「思想的に赤化した」上に「肺病院」で没した場面にも留意したい。父福次郎は栄介に向けて「さあ。これからお前が長男だぞ」「しっかりやらなきゃあ」と言い、「しかし栄介には、自分が長男になった、という実感は全然湧いて来なかった」とも記されているのである。梅崎家の次男春生が兄の死によって長男になった事実はなく、この長兄竜介の早世は明らかな創作と言える。

つまり「狂い風」の中でも戦前——梅崎家の事実と照らし合わせて、大正末から昭和十九年ごろまでと推定される時代——を舞台とする回想シーンにおいては、大日本帝国憲法（明治二十二年二月公布）、明治民法（後二編〈親族・相続〉三十一年六月公布）下における「家」と「長男相続」の問題、いわば「家父長制」が社会背景

として色濃く存在している。幸太郎は「家父長制」下の戦前社会にあって、「本家の旦那」として登場し、「長男であるが故に父祖の財産をひとり占めにして、そして旦那風を吹かす」人物として描かれているのである。幸太郎は戦前社会における「家父長制」をまさに体現する人物と言うことができる。

一方、小説発表時と同じ昭和三十年代と思われ、東京が舞台となる物語の現在に目を向けると、幸太郎は「独りで上京し」、「十数年」ぶりに栄介の前に現れる。「今頃になって、おれ（栄介）にばかりつきまと」い、「金をせびりに来る」人物として描かれるのである。栄介は幸太郎に毎月五千円提供することにしたが、幸太郎はその五千円以外にも堂々と金を借りに来、栄介は「結局借りられてしまう」。

幸太郎は物語の現在まで、跡継ぎのできないままであったらしく、他に身寄りはないようである。そのような老人が、甥である栄介をあてにして訪ねてきたこと自体、決して不自然でない。ただし幸太郎の場合、栄介に「金をいくらいくら貸せ」などと口を利き、相変らず横暴な態度で接している。幸太郎にとって栄介は、甥と言うより、以前養子に予定していた人物であり、あるいは実子かもしれない。それ故幸太郎は、そこから金銭を受け取って当然と捉えているのであろう。戦前社会の隠居した家長が、実子または養子の跡継ぎに対する姿勢とよく似ている。幸太郎は、戦後においてなお「家父

長制」を引き摺る人物としても表されているのである。

逆に栄介の場合、幸太郎は伯父である上に、養父になる可能性があった、かつての学資援助者である。もしかしたら伯父でなく、実の父ではないかとも思われる。自分の立場上、金銭援助は断り難いとも、もちろん感じていたであろう。だが栄介は幸太郎を「相手にし」たくなく、「すでに死んでいなければならぬ人間」とさえ思っている。それでも幸太郎がつきまといてくることで、「養老院に入りたい」とまで考えている。

この栄介の態度には、戦後日本の社会状況、すなわち新憲法（昭和二十一年十一月公布）、新民法（昭和二十二年十二月、〈親族・相続〉全面改正）による「家制度」廃止の影響が認められよう。¹⁵戦後の新憲法、新民法によって「家制度」が廃止されたことは、老親を扶養する義務が無くなったと多くの人々から解釈されたのである。老親の面倒を家族内で見なくてもよいという考えから、親戚の間を盤回しにされる老人が多く現れた。また老人の面倒は家庭でなく、社会で見るとの意見が強くなる中で、より多くの養老院（老人ホーム）設置が求められた。実際、「狂い風」の連載が完結した直後の昭和三十八年七月、老人ホーム設置等に関わる条項を含んだ「老人福祉法」が制定されている。¹⁶

つまり幸太郎を避け、いやいや金を渡し、「養老院に入りたい」と考える栄介の姿は、「家制度」廃止後の老人扶養に対する日本人

の態度の一典型を表しているのである。かつて本家の家長として横暴に振舞い、今なおその名残をとどめる幸太郎に対して、新民法下の物語の現在、栄介が憎み、反発するのはある意味当然であって、家父長制の時代に対する戦後日本人の反動的な心情を栄介の姿が代表しているとも言えよう。

ところで、この幸太郎に対する栄介の態度については、栄介の妹の夫・川津が「義兄さんは心のつめたい人なんだ」と批判し、「私」も「冷酷なもんだね」と難じている。これら川津と「私」の台詞を通して、新民法下の老人を巡る社会状況に反発を感じる守旧派のな人々の意見も梅崎は提示している。幸太郎に対する栄介の態度が、栄介の側に立った一面的な表現にとどまり、作者の主観として受け取られることを避けるため、あえて第三者的な立場から栄介批判を行わせ、表現を客観化していると言えよう。

以上のごとく、「狂い風」には、幸太郎という矢木本家の家長たる人物を登場させ、栄介、城介との関わりを描いていくことによって、戦前から現在に至る「家制度」「家父長制」の問題が表されていた。「狂い風」における「家族小説」としての側面は、すなわち「家制度」「家父長制」の表現と言い換えることができる。

三

それでは城介と幸太郎の関係はどのように描かれているのだら

うか。

まず中学を退学した城介の奉公先として、東京の葬儀屋を強く勧めたのが幸太郎である。事実を確かめると、梅崎の弟忠生も中学退学後、東京へ奉公に出ている。しかし奉公先は遠縁の〇少将によって紹介された金物商であった。⁽¹⁷⁾つまり梅崎は忠生をモデルに城介の東京行きを描きつつも、奉公先をあえて「葬儀屋」に設定し、しかもそれを幸太郎が勧めるという創作を加えているのである。

梅崎春生は、城介の奉公先として「葬儀屋」を勧める理由について、幸太郎に次のように語らせている。

「東京に奉公に出るんなら、葬儀屋がええ。戦争はこれからもっと広がるから儲けにはこの商売が一番だ」

そのように語る幸太郎の心境について、さらに栄介の視点から次の如く記している。

あるいは幸太郎は子供の頃、日清戦争で戦死者の葬列が、毎日のように道を通っていて、その印象が強く残っていたのだらう、とも思う。そしてそれが城介の身のふり方に、結びついた。

幸太郎が営む「海産品問屋」に目を向けると、「海産品は軍の需要物」である上に、「戦争のために」幸太郎の店にも「受注や発送が多くなっ」て、幸太郎には「御用商人的落着きが、身のこなしに具わって来ていた」と記されている。幸太郎はまさに戦争によって利益を得た人物であり、その為であろうか、右に見るように、「戦

死者」さえも商売上の利益と結び付けて考えているのである。城介が東京の葬儀屋へ奉公に出たのは、本人の承諾があったとは言え、本人の気持ちの方が優先されたからでは決してない。戦争をいわば「儲け」の手段と捉える、この幸太郎の戦争認識が最大の要因であったことを押えておきたい。

次なる幸太郎と城介の間わりは、城介の出征に際してである。城介の出征前夜、幸太郎は、「祝出征の宴を幸太郎宅でやりたいから、今夜来て呉れ」との連絡を福次郎宅に届ける。しかし「壮行会は「うちでかんたんにやります」と城介からは断っている。幸太郎は「宴でなく、あえて「祝、出征の宴」という言葉を用い、しかもその宴を本家の自宅で行おうとしているのである。幸太郎はここでも城介本人の気持ちに配慮することなく、城介の出征を矢木家にとって、むしろ祝うべきことと捉えているのである。

さらに城介の死に際しての幸太郎の行動についても見てみたい。

城介が「戦病死」したと言う、実際とは異なるが、ともかく城介が戦地で死去した「公報」が矢木家に届く。すると幸太郎は遺骨が届くよりも早く、自らの筆で「故陸軍衛生曹長矢木城介之霊」と記した木柱を作成し持ってくる。母親は遺骨が戻る前であったから、その掲示を断ったが、実際に遺骨が届くと、幸太郎は直ちに「店の若い者たち」に指示して木柱を立てさせた。加えて「門柱から門柱へ横木を渡し『英霊の家』と書いた板を、それに打ちつけ」させた。

幸太郎は城介の「葬式」を出したがる素振りさえ見せ、それについては栄介と母親に拒否されている。

つまり幸太郎は、城介の戦地における死をあくまで〈名譽の戦死〉として受け取っている。「英霊の家」などという看板は栄介や母親にとって「いかにもそらぞらし」いものでしかありえないが、そのような身内の心情をやはり汲み取ることなく、幸太郎は城介の戦地での死をむしろ矢木家の名譽と捉え、威信を示す機会として利用しているのである。幸太郎が城介の「葬儀」を出したかったのも、それを盛大に執り行うことで、「本家の威武」と自らの権力を誇示したいと思ったからに違いあるまい。城介の奉公先として幸太郎が「葬儀屋」を勧めた理由の奥底には、幸太郎の葬儀に対するこういった考え方も存していたと言えよう。

このように幸太郎は戦争を「儲け」の手段と捉え、また出征、戦死についても「家」と自身の権力を示す機会と捉えていた。そして城介は中学退学以来、死後に至るまで、そのような幸太郎の戦争認識に振り回される立場にあったと言いうことができる。

四一(1)

考察のまとめに入る手掛かりとして、今度は「狂い風」の最終場面を検討してみたい。

「多磨のおん墓に詣りたい」と幸太郎が希望したことで、栄介は

大学の教え子に運転を頼み、「私」を同行させ、幸太郎を多磨墓地に連れて行く。多磨墓地には、九州から骨を移した福次郎と母、城介らの墓があった。しかし、いざ多磨墓地に到着してから、幸太郎が希望していた行き先を栄介は「かん違い」していたことに気付く。幸太郎は「多磨の御陵」、つまり「大正天皇陛下のおん墓」に詣りたかったのだ。幸太郎は多磨墓地にある「弟夫婦や甥たちの骨の収まった墓所を見よう」とはしない。車は多磨御陵へ改めて向かう。御陵に至ると、幸太郎は参拝に向かい、「私」と栄介は入口に留まって待つ。そして先にも言及した〈狂い風〉を見上げる栄介を記して物語は結ばれる。

この最終場面において、幸太郎は「私」の視点から「小柄でしなびていて、眼が不安そうにびくびく動いていた。コブも巨大なものと思っていたのに、首のつけねにちんまりとくっついているだけだ」とも記されている。横暴な〈本家の家長〉として表される幸太郎像が、実は栄介の視点でのみ、つまり栄介の主観に過ぎない可能性を示し、より客観的であろうとする梅崎春生の表現意識が改めて確かめられる。

しかし、ここで重視すべきなのは、やはり幸太郎が城介ら肉親の墓には見向きもせず、「御陵」を参拝しているところであろう。幸太郎は未だに天皇を崇める人物として描かれているのである。戦争を「儲け」の手段と捉え、家長としての権力を行使しながら、「本

家」の威信を誇示してきた幸太郎という人物の背後に何が存在するのか、この最終場面に明示されていると言えよう。

戦前の日本社会において「家長」は、幸太郎に限らず、絶対の権限を持っていた。家族は家長の権限の下で一体となり、「家」を永遠に存続させていくことが良しとされていたのである。それは何故か。

昭和十二年五月、文部省の編纂により『国体の本義』が発行された。「狂い嵐」の回想シーンにも該当する当時、「国体を明徴にし、国民精神を涵養振作」することを目的に頒布された冊子である。同書を見ると、国民生活における「家」について次のような説明が為されている。

我が国民の生活の基本は（中略）家である。家の生活（中略）の根幹となるものは、親子の立体的関係である。この親子の関係を本として近親相倚り相扶けて一団となり、我が国体に則つて家長の下に渾然融合したものが、即ち我が国の家である。（中略）我が国は一大家族国家であつて、皇室は臣民の宗家にましまし、国家生活の中心であらせられる。臣民は祖先に対する敬慕の情を以て、宗家たる皇室を崇敬し奉り、天皇は臣民を赤子として愛しみ給ふのである。（中略）我等の祖先は歴代天皇の天業恢弘を翼賛し奉つたのであるから、我等が天皇に忠節の誠を致すことは、即ち祖先の遺風を顕すものであつて、これ、

やがて父祖に孝なる所以である。

「我が国は一大家族国家」、すなわち「家」の集合体として成り立っているとの発想であり、天皇と国民の関係を「家」における親子関係になぞらえている。それ故に、父祖に対する孝行は、その先にある天皇に対する忠誠として繋がっているとの考えである。言い換えれば、大日本帝国は、それぞれの「家長」に率いられた「家」の集合体として成り立っており、その家族国家全体の家長として天皇が存在する。「家長」が持つ強力な権限の背後には、天皇が存在していたのである。明治民法下の国民生活において「家」が重視され、家長の権限が強調されていたのは、天皇制による国民支配を強化せんとするためだったのである。

「家父長制」をまさに体現する人物として描かれている幸太郎。実は彼の背後には天皇が存在していた。幸太郎が矢木家の内で強力な権力を持ち得たのは、「家制度」の下で、家長の存在が天皇に擬されていたからに他ならない。この小説において幸太郎は、「家父長制」のみならず、その背後にある天皇の存在をも体現し、いわば天皇制の権化として表されているのである。

そのように考えると、うどん食逃げ事件以来、城介を死へと導いた速因とも言うべき人物たち、つまり級友三人の父親、中学校長、中田少佐らが何を表しているのか、いま少し違った角度から見えてこよう。

級友三人の父親は、「裁判官」「電鉄重役」「医師」という社会的地位の高さを利用して、物事を自分に都合の良いように運ばせる権力を笠に着た人間たちである。中学校長と中田少佐は、校長、少佐という自分の地位を守るため、上層部の顔色を窺う一方で、生徒、部下に対しては思いやりを全く欠いており、権力に媚びへつらいながら、自分の権力は行使する人間たちである。以上の彼等五人は、いずれも天皇を頂点とする戦前日本の縦社会を肯定し、権力を志向する人物と言える。幸太郎も含めて、うどん食逃げ事件以来、城介の前に現れた人間たち、その全てに天皇制下の社会秩序が色濃く反映されているのである。

つまるところ、城介を自殺に導いたものは、天皇制下の日本社会であり、より直接の原因として天皇の名の下に遂行された戦争が存在していた。そして、その〈天皇制〉および〈天皇制下での戦争〉こそが、城介のモデルであり、梅崎春生の弟である忠生を自殺に迫りやった原因として、作者の批判の対象に据えられていることは言うまでもない。

四一(2)

梅崎春生は昭和二十八年八月号『新潮』に発表したエッセイ「天皇制について」で、「現代にあって天皇制は過ちであり、「早く天皇制のスイッチをひねって止めてしまった方がいい」と記し、天皇

が「私は人間であると宣言したのは、ついこの間だったような気がするのに」「半分神様になりかかっている」ことを不安視している。そしてさらに次のように書いている。

(前略) 率直に言うと、私は天皇に対する信愛の念を失ってすでに久しい。(略) 天皇にとってみれば、この私などは路傍の小石に過ぎまいが、私にとっては、天皇一家からずいぶん損害を受けている。戦争に引っぱり出され、青春を犠牲にし、物心両面の損害をうけている。私などはしかし軽い方かも知れない。生命を失ったり、言語道断の損害を受けた人が沢山ある。

梅崎春生は自らを天皇から「損害を受け」た「犠牲」者と捉え、天皇制が戦前と異なるとは言え、今なお無くならないことに批判的な見解を抱いていた。¹⁹「家父長制」とその背後にある「天皇制」を体現する幸太郎は、このような梅崎春生の天皇制批判を痛烈に反映した人物像と言える。しかもこのエッセイを踏まえれば、物語の現在において、しつこくつきまとう幸太郎を栄介が避け、養老院に入りたいと考えるその設定は、天皇制が戦後も存続していることを批判的に暗喩し、廃止を訴えていると見ることもできよう。

右のエッセイを書くにあたって、梅崎春生の念頭に想起していたのは、一つには自らの戦争体験²⁰であり、いま一つは弟忠生の戦地での自殺であったに違いない。春生も、忠生も、天皇によって「戦争に引っぱり出され、青春を犠牲にし」た。そして忠生こそ、そのた

めに「生命を失う」という、「言語道断の損害を受けた人」に他ならないからである。

おわりに

かくて「狂い風」には、「家父長制」という「家族」の問題が扱われ、かつ「家父長制」の背後に潜む「天皇制」および天皇制下の「戦争」が描かれていた。弟忠生の命を奪われた怒りによって筆を起し、自らが育った梅崎家を土台としつつも、多くの創作を加えながら前日本の国家イデオロギーを批判的に追及した長編として、「狂い風」は梅崎春生文学の中でも秀れた一作と言い得るのである。

注

(1) 『群像』連載の初出時および初刊本（昭和三十八年九月、講談社）では「狂い風」と表記されているが、新潮社版『梅崎春生全集』第六巻（昭和四十二年五月、新潮社）では「狂い風」となっている。本論では引用の底本『梅崎春生全集』に従い、「狂い風」と記す。

(2) 「狂い風」を「家族小説、戦争小説」と定義するにあたって、武田泰淳は以下のように記している。『私』の観察した栄介、兄のながめた弟、戦友の報告する戦地での城介、および矢木一族の有様などが、ないまぜになって、小説は次第に複雑な構成となり、社会的なひろがりを増す。／＼ことに兄弟の伯父にあたる幸太郎は、かなり痛烈に否定されて描かれているが、やはり矢木一族のマイナス性を分けあたえられていて、好ましい。あくまで「書評」である所為もあって、これ以上詳しい考察を見

ることはできない。また幸太郎に「分けあたえられて」いるという「矢木一族のマイナス性」についても、引用部以外を含めて、具体的な説明は為されていない。

(3) 戸塚麻子は、「狂い風」における〈家族〉のモチーフについて、父福次郎、双子の弟城介、伯父幸太郎の三人が「栄介にとって特徴的な意味を持って描かれている」ことに注目し考察を進めている。栄介にとって、福次郎は「肉体的でリアルな死」を、城介は「抽象的で観念的な死」を体现する存在であり、また城介は飲酒を教えるなど、「栄介の『おとな』への変化を促す役割を担わされている」と分析する。一方、「幸太郎は、二人の特徴的な死者に濃厚につらなる生者」であり、「しかし近い将来確実に死ぬであろう人物」として、「観念と現実のどちらをも体现する人物」だと論じている。

(4) 以下の梅崎春生および梅崎家に関わる事実確認は、和田勉作成「梅崎春生年譜」（和田勉『梅崎春生の文学』昭和六十一年十一月、桜楓社）による。

(5) 梅崎春生はエッセイ「男兄弟」（昭和三十六年十一月『新潮』）にも次のように書いている。「六人兄弟の中、上三人が戦争にかり出され、三男（忠生という名）が戦病死した。今五人生き残って、東京にいる。歩留りとしては、良好の方だ。忠生の戦病死について、当時隊長から手紙があり、急に死んだとあったが、病名は書いてなかった。終戦後その戦友が私を訪ねて来たので、いろいろ事情を聞いた。／＼それによると忠生の部隊は蒙古にあり、太平洋戦争で香港作戦に転じ、また蒙古に戻って来た。そして内地帰還の令が出た。内地に戻って、召集解除である。よろこびにあふれた出発前夜、忠生は皆の前で白い錠剤をたくさんのみ、寝についた。翌朝見たら、死んでいた。忠生は衛生軍曹だから、薬は自由になる。白い錠剤は、睡眠薬であった。量を間違えたわけではなく、覚悟の自殺であ

る。なぜそんな嬉しい日に、自殺をしたか。その理由を書こうと思ったら、もう紙数が尽きた。これは小説の方に廻そう」。なお終戦後、忠生の戦友から「いろいろ事情を聞いた」のは「梅崎春生年譜」(注(4))によると、昭和二十五年のことである。

(6) 『戦後派作家 梅崎春生』

(7) 『梅崎春生年譜』(注(4))による。

(8) 梅崎家の長男光生が著した『幽鬼庵雑記』(昭和五十二年七月、永立出版)による。

(9) 注(8)に同じ。

(10) 梅崎春生のエッセイ『憂鬱な青春』(昭和三十四年十二月、群像)による。

(11) 注(8)に同じ。

(12) 梅崎恵津「幻化の人」(昭和四十二年三月『新潮』)

(13) 『幽鬼庵雑記』を著したことでも明らかなように、長兄光生は、梅崎春生が「狂い風」を執筆した時点においても存命中であった。

(14) 「狂い風」の回想シーンでは、栄介が小学生とおぼしき矢木家の餅つきの場面から、栄介の出征までを描いている。これを梅崎春生自身の年譜にあてはめると、大正末から昭和十九年までの時代と推察できる。

(15) 例えば岡本多喜子は『老人福祉法の制定』(平成五年八月、誠信書房)の中で、「敗戦後の民法改正は、長男も含めて、子供が親の面倒を見る必要がなくなると解釈され(中略)高齢者を不安に陥れた」と記す。また全国老人クラブ連合会編『全老連十五年の歩み』(奥付日付なし)には、戦後の社会風潮を語る文章として、次のような『大阪新聞』日付不明の記事が引用されている。「新憲法は従来の家族制度に大変革をもたらした。親に対する子女の扶養義務についてもいまわしいトラブルが多く、戦後の混乱から自由と放縦を履き違え、一般老人を軽視するようになった。誤った個人主義から老人はとかく家庭で邪魔者扱いをうけるようである

(後略)」。さらに矢野嶺雄は「老人ホームについて」(昭和二十九年八月『養老事業だより』)で「我国に於ては去る昭和廿六年頃から全国養老事業大会の議題として『有料老人ホーム』設置促進の問題が取りあげられてきた」と記し、その理由として「終戦後、家族制度の変革や、それに伴う各種法令の改訂により」「子供に依存してはならないという社会組織に移りつゝ、あること」を挙げている。

(16) 厚生省社会局老人福祉法課監修『改訂老人福祉法の解説』(昭和六十二年十一月、中央法規出版) 参照。

(17) 注(8)に同じ。

(18) 同書序文による。

(19) 梅崎春生は昭和三十年十二月号『世界』に発表した短編「寒い日のこと」で、「大正天皇の御大喪の日」を取り上げている。あまりにも寒かったその日、大人も、子供も、牛までも「腹を立てて」いた様子を描き、天皇制に対する「怒り」を表した気配がある。こちらも参照されたい。

(20) 梅崎春生は「昭和十九年」六月一日、海軍に召集され、佐世保相之浦海兵团に入団。終戦まで、針尾・指宿・防府・坊津・桜島などの基地に配属され「た」(梅崎春生年譜)(注(4))による。

*本文引用にあたって、「狂い風」は新潮社版『梅崎春生全集』第六巻、「暴力ざらい」「男兄弟」「憂鬱な青春」「天皇制について」は同七巻(四十二年十一月)、「寒い日のこと」は短編集『侵入者』(昭和三十三年四月、角川書店)に拠った。引用文中、旧字体は新字体に改め、傍点は私に付した。

— たかぎ・のぶゆき、別府大学准教授 —